



▲厚別図書館は、身近な図書館として親しまれています

いざ物語の世界へ

読書をしていて、時間のたつのを忘れてしまったという経験は誰にでもあるのではないでしょう。本には、映画やテレビにはない魅力があります。映像が見えない分だけ想像が広がり、自分が物語の主人公や登場人物になったようにお話しの世界に入り込めます。読書には、言葉が身に付くだけでなく、感性が豊かになり、表現力や創造力が高

まるという利点があります。特に最近子どもは活字離れが進んでいると言われています。だからこそ、この冬は家族みんなで読書に親しんでみませんか。

読書のきっかけに

図書館には、図書の閲覧、貸し出し以外の楽しみ方もいろいろあります。厚別図書館では、読み聞かせをはじめ、人形劇や紙芝居があるおたのしみ会、映画会などが行われています（詳しくは区民のページ7ページをご覧ください）。ほかの図書施設でも、さまざまな催しが行われていますので、ぜひ一度足を運んでみてください。たくさんのお話を聞いたりすることとで、読書を好きになるかもしれません。

◇ ◇ ◇
お目当ての本が無くて、ほかの図書館から取り寄せたり、予約したりすることもできます。分らないことがあれば、お気軽に職員にお尋ねください。

心に残る感動を

「読み聞かせボランティア『てぶくろ』」

「待あーてーい、小僧」お寺の小僧さんが山姥に追われ、必死に逃げています。これは昔話「三まいのおふだ」の一場面。人形劇を演じているのは、読み聞かせボランティア「てぶくろ」の皆さんです。

この日は、十二月十四日に厚別図書館で行う「おたのしみ会」(詳しくは区民のページ7ページをご覧ください)の準備の真っ最中。人形劇の練習をしたり、人形や子どもたちにプレゼントするマスコットを作ったりしていました。

「てぶくろ」は、厚別図書館で行われた読み聞かせボラ

ンティア養成講座の受講者で、発足しました。今年で十五年目を迎え、現在は十八人が参加。厚別図書館の「たのしいお話し会」などで、読み聞かせや紙芝居などを行っていただきます。「昔話を知らない子どもたちが、結構多いんですよ」と話すのは、代表の森田陽子さんです。物語に引き込まれた子どもたちの目が、生き生きと輝いてくるのが魅力と云います。人形や小道具、紙芝居などは、メンバーの手作り。一つ一つにこだわりと愛情が感じられます。森田さんは、「物語を見たり聞いたりして、

感動したことが、心の栄養となって成長してくれればうれしいですね」と話してくれました。たくさんのお話を聞いて感じたことは、いつまでも子どもたちの心に残ることでしょう。

さて、山姥に追われた小僧さんは、無事に逃げることができたのでしょうか。、それは見てのお楽しみです。

◇ ◇ ◇
「たのしいお話し会」は、毎月第一水曜日、第二、三、四土曜日に行われています。活動に興味のある方は厚別図書館までお問い合わせください。



▲山姥の迫力に思わず泣き出してしまいう子もいるそうです
(山姥=山奥に住み怪力を発揮したりするとされている伝説的な女。鬼女)



▲「てぶくろ」の皆さん(上段左が森田さん)